The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	総評「合評会／アカデミーへの報告」
Author(s)	小泉，義之
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2024, 6, p. 6-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94554
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集１　第９回臨床哲学フォーラム（シリーズ：規範の外の生と知恵）
テーマ「狂気な倫理：「愚か」で「不可解」で「無価値」とされる生の肯定」

総評「合評会/アカデミーへの報告」

小泉　義之

本書の 13 本の論文それぞれに対しては、三人のコメンテーターの方々が論評を行うので、ここでは、本書の編者、小西真理子さんの「まえがき」と河原梓水さんの「あとがき」について幾つか述べ、次いで、この論文集に関係しそうな書物を取り上げ、考えてみたいと思います。

小西真理子「まえがき」、河原梓水「あとがき」

本書の編集の経緯、そして出版にいたる経緯は、そこに書かれている通りです。ここで強調しておきたいのは、お二人の編集者によって本論文集はできあがったということです。つまり、私はまったく関わっておらず、途中経過を時折お知らせいただいていただけです。そこから察するに、お二人の苦労は相当のものであったと思います。これまで私も何冊か論文集の編集にあたったことはあるので編集の苦労は承知していますが、それに比しても相当な苦労であったかと思います。

さて、河原さんは「あとがき」で、本書の経緯を書いたあとに、立命館大学大学院の先端総合学術研究科（略称、先端研）における私の活動や院生の有り様について述べて、それに続けて、本書の書名にも関わり、次のように書いています。引用します。

> 本書に収録された論考のなかにも〔……〕狂人の声があるかもしれない。それはある人々にとっては完全に無価値な、狂ったたわごとかもしれないが、その場合は、一体何を基準に自分が正しいと判断しているのか、その判断によって何をしたいというのか、お前は何様なのかと、問いかけたいと思う。／本書は、狂人の声、愚かで、不可解で、無価値とされている生を一貫して肯定するという立場をとっている。しかしそれは、こんな人がいてもいいよね、他人を尊重しましょう、というだけのことを言いたいためではない。レベルの差はあるが、それを肯定しきった際には、例えば国家程度のものが転覆されるような生に着眼しているつもりである。そのように受け止めてもらいたいと考えている。（297 頁）

ここには、一気に複数のことが書きとめられています。そこから幾つかを、多少書きかえながら、取り出してみます。

①「狂人の声」が本書に書きこまれているかもしれない。あるいは、「狂人の声」を聴いてそれが書きこまれているかもしれない。
②その「狂人の声」を、「無価値な、狂ったたわごと」と受けとめる人は、おのれの正しさ、おのれの振る舞い、おのれの有り様を、反省するべきであるし問い質されるべきである。
③「狂人の声」、「愚かで不可解で無価値とされる生」を「肯定」しなければならない。ここに「肯定」とは、あるいは、肯定しきることは、さまざまな「レベル」で「転覆」を引き起こすような、そのような「生」の肯定であって、単なる寛容や尊重の態度とは異なっている。

私もまったく同じように考えてきましたし考えていますが、いくらか自分のことを顧みて反省的になるなら、あるいはまた、関連する学界や言論界の議論を思い返すなら、おそらく幾つもの疑問や反論を出すことができるかと思います。また、何よりも、本書所収の個別の論文に即すなら、さらに疑問や反論が出されるかと思います。

そして、①②③は、ある研究者の倫理、ある研究者の生を言いあらわしていると読むこともできます。この点についても、おそらく幾つもの疑問や反論を出すことができるかと思います。また、繰り返しますが、個別の論文に即すなら、さらに疑問や反論が出されるかと思います。

このまま、小西さんの「まえがき」に移ってみます。

小西さんの「まえがき」は、吉田おさみ『〝狂気〟からの反撃――精神医療解体運動への視点』からの引用で始まっています。

吉田おさみのその本は、1980 年に刊行されました。私、26 歳のときです。諸般の事情があって、まだ文学部の学生でありデカルトで卒業論文を書いていた頃です。ちなみに、フーコー『狂気の歴史』の翻訳が出たのは 1975 年です。他方で（他方、と言っておきますが）、当時はいわゆる出版精神医学が盛んで、木村敏『自覚の精神病理』が出たのは 1970 年、中井久夫『分裂病と人類』が出たのが 1982 年です。そして、いくらか「専門的」になりますが、講座『分裂病の精神病理』全 16 巻は、1972 年から 1987 年にかけて出されていました。つまり、あの時代は、狂気というか、精神病というか、精神障害というか、ともかくそれについての知や研究が「ブーム」になっていたわけで、当時の私も一生懸命にそれを追いかけていました。そして、そこに、吉田おさみが登場しました。まさしく私も「反撃」をくらったと言えると思います。

小西さんは、その吉田おさみの引用で始め、それを受けて、次のように書きついでいます。引用します。

吉田の意味する「狂気」とは、精神障害とほぼ一致するような意味をもつものと言えるが、私たちが生きていくなかで正常人に無視される語り口はさまざまに存在する。常識を逸脱していると警戒されるラディカルさをもっていたり、突拍子もなく何を言っているのかわからないとされるものであったり、正確な知識や良識からすれば正当でないとされるものであったり、単に病んでいるとか、支援や教示が必要であると認識されたりするような発言に対して、拒絶や否定が示され、介入の必要性が説かれる事態を、これまで度々知覚してきたように思う。〔……〕私は、学問の世界の魅力のひとつは、そのような〔ともすれば切り捨てられかねない〕思想や物言いが、世の中で発せられるための武器や場所を与えることだと信じている（ただし、闘わない研究も、別の意義をもつと考えている）。こうした武器は、そこにある語りの「意味」を変容させ、結局は正常人としての物言いに従わせるもののようにも思える。しかし、おそらくその武器をもったとしても、彼らの「声」は往々にして切り捨てられるものだろう。それならば、その武器を手にし、それを補強することにも価値があるのかもしれない。（ii）

ここでも一気に複数のことが書きとめられています。精確に読み取れないところはあるのですが、そこから幾つかを、多少書きかえながら、取り出してみます。

ⓐ吉田おさみは、「狂気」をほぼ「精神障害」と一致するものとして書いている。
ⓑ「正常人」が「無視」する「語り口」や「発言」があり、それに対して「正常人」は、「拒絶や否定」を示すだけではなく、「介入」の「必要性」を説いている。そのようなことは「度々」「知覚」される。
Ⓒ「学問」は、その「語り口」や「発言」、「思想」や「物言い」が、世に（正常人に向けて）発せられる「武器」や「場所」になる。
ⓓしかし、「学問」は語りの意味を変容させ、〈正常化〉させるのではと疑われる。
ⓔしかし、「正常人」によって無視・拒絶・否定され介入される人自身がその「武器」を手にしたところで、やはり「正常人」によって同じことがなされるだろう。そうであれば、「武器」を「補強」することにも価値があるだろう。

このあと、小西さんの「まえがき」では各章の梗概が書かれ、最後は吉田おさみからの引用で閉じられています。すなわち、「私は、皆さんに、まず日常を疑う、自らの正気を疑うということからはじめられるようおすすめします」とです（viii に引用）。

さて、二人の編者の「まえがき」と「あとがき」を読むとき、どう語りつぐべきか迷います。これは指摘しておいてよいと思いますが、近年の学界における研究動向、それはさまざまな分野で、さまざまな形で見られるものですが、二人の文章はそれらに対する相当に厳しい批判を含んでいるところがあるかと思います。

そこで、私としては、自分が読んできたものから題材をとって、二人の文章に対応していきたいと思います。取り上げるのは、第一にフーコーの『狂気の歴史』、第二に近年の幾つかの書物です。

弁証法的人間の終焉：フーコー『狂気の歴史』から

ミシェル・フーコーのこの本は、1961 年に初版が『狂気と非理性』というタイトルで、副題が『古典主義時代における狂気の歴史』で刊行されました。博士学位論文です。そして、1972 年に第二版がタイトルを変更して当初の副題がタイトルになって刊行されました。その際に、初版の序文が削除され、新たな序文が付けられています。そして、各国の翻訳は、おおむねこの第二版を、初版の序文が差し替えられた第二版を翻訳の底本としています。これに対し、日本語訳は、初版の序文も翻訳されています。

その初版の序文を削ったフーコー自身の思惑は別として、私自身はいまでも重要な文書だと思っています。その冒頭には、エピグラフとしてパスカル『パンセ』の一節が掲げられ、それを受けて本文が書き出されています。引用します（以下、翻訳は変更しています）。

> パスカル「人間は必ず狂っているので、狂っていないことも、別の傾向(tour)の狂気によって、狂っているだろう。」
> この別の傾向の狂気の歴史を書く必要がある。その別の傾向の狂気によって、人間たちは、主権的理性を行使して隣人を監禁しておきながら(enferme)、非‐狂気の情容赦ない言葉を通して意思疎通して相互承認するのである。この〔人間たちの〕共謀の時(moment)を再発見する必要がある。この共謀が真理の支配となって決定的に確立してしまう前に、また、この共謀が叙情的な抗議によって掻き立てられてしまう前に、再発見する必要がある。歴史の中で、狂気の歴史の零度に辿りつこうと試みること。そこでの狂気は、未分化の経験、分割自体からいまだ分割されていない経験である。この「別の傾向」をその曲線の原点(origine)から辿って記述すること。その傾向の行使によって、以後互いに外在的で、あらゆる交換に耳を塞ぎ、一方からして他方は死んだも同然の二つのものとして、〈理性〉と〈狂気〉がやって来るのである。（7 頁）

フーコーは「狂気の歴史」を書こうとしています。ところで、その歴史とは、「別の傾向」の狂気の歴史なのです。「別の傾向」の狂気とは、パスカルの一節に読まれるように、「狂っていないこと」の狂気のことです。言いかえるなら、正気であることです。その正気の「人間たち」は、現在においても、隣人を収容し監禁します。正気の人間たちは、相互にコミュニケーションし相互承認しています。共謀しています。フーコーは、それが狂っている、別の傾向の狂気であると見做し、その歴史を書こうとしているのです。

ところで、この引用箇所の最後を読むと、フーコーは、正気の理性の狂気によって、〈理性〉と〈狂気〉が互いに外在的となり交換に耳を塞ぎ相互に他を死んだも同然のものとして扱うようになっていると書いています。つまり、フーコーは、おそらく意外なことに思えるでしょうが、理性と狂気の「交換」、外在的ではない「交換」、相互が生ける ものとして現われる「交換」を良きこととして捉えているのです。それが、別の傾向の狂気が支配してしまう前の「原点」にあると考えているのです。また、フーコーの有名な言葉「沈黙の考古学」とは、まさに現在においても、狂気と理性の「交流」を掘り出せることがあると考えているのです。『狂気の歴史』本文で、フーコーは、その「交換」や「交流」を、「対話」とも言いかえています。狂った者と狂っていない者の「対話」を現在においても掘り起こすことが、『狂気の歴史』の目的の一つです。なお、その「対話」を、精神分析での対話、精神科医の診察で例示してもよいかもしれません。また、臨床哲学における聴くこと、自助グループでの話、オープン・ダイアローグ、近年の研究動向で例示してよいかもしれません。そしてもちろん、家庭内での言い争い、学校や職場での対話ならざる話や沈黙も例になります。

ところで、先のパスカルの言葉は、本文でも引用されています。一回だけですが、引用されています。それは、第三部の「序論」で、ディドロの『ラモーの甥』を論ずるところです。

> こうして、狂気の勝利が二つの途で新たに告げられる。狂気を把握〔所有〕することによってのみ自己の確実性を確信する理性の方へ非理性が逆流していくこと。その一方で、理性と非理性が互いに限りなく、「狂っていないことも、別の傾向(tour)の狂気によって、狂っているだろう。・・・」ということを含意するような経験へと再上昇していくこと。〔……〕その含意が明らかにするのは、〔理性や非理性、狂いや狂わずへの〕所属関係が取り返しのつかぬほど脆いということであり、理性が自己の存在を所有に探し求めて直ちに失敗していくということである。理性が非理性を把握〔所有〕する運動そのものにおいて理性は疎外されるのである。〔……〕理性と非理性の関係はまったく新たな相貌となる。そこでは現代世界における狂気の運命が、異様な仕方で予告され、しかもすでに開始されている。(369-370 頁)

読解が難しいというか、文章が難しいですが（もっと簡単に書け、と思いますが)、簡単に受け止めます。フーコーは、理性と非理性ないし狂気が「対話」して、理性ないし理性的人間がおのれが狂っているのではないのかと疑うようになり、あるいはまた、理性的人間が一方的に非理性ないし狂気のことをわかっているぞと把握し所有したつもりになるそのときに実は他者のことも自己のこともまったく掴めていないと自覚するようになること、そんなことに「新たな相貌」を求めています。そこに「狂気の運命」を、肯定的な運命を見ています。しかもすでにそれが始まっていると見ています。つまり、狂気について書いたり考えたりする知識人や学者や研究者たちが（まさに理性的人間の典型です)、そのように変貌することを望んでいるのです。変貌するべきだと思っているのです。

そして、フーコーは、そのような人間のことを、第二部の「序論」で「弁証法的人間」と呼んでいます。すなわち、その弁証法的人間は、当初は、狂気は自己に対立するものとして感受します。自分は狂っていないと確信しています。狂人を対象化します。研究や学問の対象にします。しかし、この意識は狂気との言葉の「交換」に入り込んでいくと、そのとき狂気と非狂気の対立が可逆的になってきます。そのように自覚します。そうして自分も狂っているかもしれないと意識するにいたることにもなるのです。そのようにして理性的人間は変わらなければならないし、そのようにして西洋文化は変えられなければならない。『狂気の歴史』はそのための書物であるということになります。

弁証法的人間になれ、自己を変えて文化や社会を変えよ、という命法は、そのことは、そのような言葉で必ずしも語られはしなかったものの、当時、広く影響を及ぼしていたと思います。一つだけ、精神科医である荻野恒一の文章の一節を引いておきます。

> 今日の文化状況のなかでさまざまな形態のうつ病者が増えてきているように見えるのである。仮面性うつ病（内科医や婦人科医を訪ね、不定愁訴を述べる形態のうつ病）や、一見動機のつかめない自殺や人間蒸発、突然の職業や学業の放棄など、毎日のわれわれの身辺にみられる狂気の現象はいずれも、一切の価値の喪失、人生への絶望、生きつづけることの空しさの感情の具体的現われといっていい。臨床精神病理学は、うつ病にはとりわけ薬物療法が速効すると説くし、またそれは事実ではあるが、それは医学でいう対症療法に外ならないのであって、真の人間学的精神医学の立場からすれば、旧来の伝統的価値規準や人生観にとって代りうる新しい価値規準と、これに基づく生き方が確立されないかぎり、このような現代的うつ病的狂気からの本格的脱却は不可能だというべきなのである。[1]

ところで、しかし荻野恒一は精神科医であることを放棄はしませんでした。真の学問を担っていると考えたからです。その点、フーコーもおおむね似た道を辿ったように思われます。『狂気の歴史』の初版刊行後に書かれた、「狂気、営みの不在」という有名な文書があります。これは幸いにも『狂気の歴史』日本語訳の付録として訳されています。思い切り単純化して、いくらか捻じ曲げて言ってみますが、ここで「営み」とはフランス語で oeuvre、「作品」の意味を持ちます。ですから、狂気とは作品の不在ということになります。ここでフーコーが念頭に置いているのは、ニーチェやアルトーです。彼らは、精神病者としての狂人となっていますが、その狂人として遇される期間に何も作品は書いてはいません。狂っている間は作品を書いていない、書けていないのです。ところが、フーコーは、ニーチェやアルトーについて作品を書いています。狂ってはいないのです。弁証法的人間ならば、そこで書くことを止めるべきではないのかという疑念が湧いてきます（ここがデリダがツッコミを入

[1] 荻野恒一「文化と狂気」『現代思想』臨時増刊号、第三巻第六号、1975 年、61 頁。

れたところの一つです)。ある時期、フーコー自身が書くことを止めるべきではないかと自問したことがありますが、狂気や狂人について作品を物するということ、それを対象として研究論文を書くということ、おそらくですが、それは弁証法的人間の生き方にはなりえないでしょうし、そこに狂気との「対話」が成立するとはとても言えそうにないはずです。少なくとも私はそのように考えていました。ですから、狂気や狂人について書くには、書く側には別の考え方、別の生き方が問われてきます。だから、でしょうが、フーコーは、「狂気、営みの不在」で、弁証法的人間は「死んだ」と宣言しています。では、弁証法的人間が死んだ後、そんな人間が終焉した後、以上のような課題を抱えていた理性ないし理性的人間はどうなったのでしょうか。どうなるべきだったのでしょうか。

他者、構造的他者、マイノリティー、多様性・・・、ナラティヴ、エスノ、ライフ（ヒ）ストーリー、調査、インタビュー、傾聴、対話・・・

振り返ってみますと、以上のような狂気や狂人の位置に、それこそ作品や研究の対象として、その後、他者というカテゴリーが、そして多様なマイノリティーが入り込んできたと思います。あるいは、研究対象はそのようにして押し広げられてきたと思います。そのような営み・作品がアカデミーの学業として地位を得てきたわけです。ただし、もはや研究者や書き手は、おそらく読み手も、弁証法的人間ではありません。弁証法的人間になろうとはしていません。その点を近年のものから四つほど引いて確かめておきます。先ず、河内重雄『日本近・現代文学における知的障害者表象』の一節を引いてみます。

> 本研究の目的は次の通りである。すなわち、主に文学作品における知的障害者の語られ方を通史的に考察することで、近代以降の日本における人間観がいかなるものであるのか、人間観との関わりで知的障害者はどのように語られてきたのか、そしてこれから知的障害者や人間はどのように語られるのかを、考えることである。〔……〕啓蒙主義においては、人間とは理性や意志が教育によって伸び、社会の発展に益する存在とされている。日本の近代化は、人間という言葉、概念を抜きに語ることは不可能である。〔……〕人間が、理性や意志があり、教育し得る存在であるのに対し、「白痴者」は理性や意志を持たぬ、教育し得ない存在であるという、二項対立（人間／「白痴者」）の図式が成立したのである。〔……〕近代以降現代に至るまで、知的障害者（＝「白痴者」、「精薄者」等）について語ったり問うたりすることが、人間とは何かを問い直すことになる場合があるのは、このような二項対立で考えてしまうからである。どのような学問領域においても、「白痴」について語ることは、間接的に人間について語ることである。[2]

[2] 河内重雄『日本近・現代文学における知的障害者表象――私たちは人間をいかに語り得るか』（九州大学出版会、2012 年）4-8 頁。

研究の目的は、知的障害者の語られ方を歴史的に考察することに置かれていますが、そのことは、人間はどのように語られるのかを考察することにも繋げられています。そして、近代にあって、人間は理性や意志を持ち教育可能な存在者であるとされ、その一方で、その対極に、理性も意志も持たず教育不可能な存在者として白痴者が置かれたとされた上で、そのような二項対立が厳然として成立してしまっているからこそ、白痴者を対象化して文学に描いたり研究で論述したりするときに、あらためて人間は何かと、間接的にであれ、どんな学問領域においてであれ、問い直されてしまうのであるとされます。

だから、何なのだということはよく読み取れない、あまり明示的に書かれていないのですが、ここには何か落ち着かなくさせるものがあります。著者は、著者に限らず研究者は、近代的で正気の人間の一員です。そもそも研究すること、作品を書くことは、理性も意志もあり教育可能な人間にできることです。そのとき、弁証法的人間であるなら、そのような自己の有り様を否定する方向に走ると思うのですが、いまや、そもそも二項対立の図式は解体されたのか脱構築されたのか知りませんが、ともかく二項対立で物を考えたり生き方を選んだりする必要はなくなったようなのです。弁証法的人間はすでに死んでいるわけです。

もちろん、河内がその著書で論述している文学作品は、単純な二項対立図式で正気の者と白痴者を描いているわけでは必ずしもないのですが、一方が他方を対象として書くという営みはいささかも疑われていないように見えるのです。あるいは、何をどう書こうが人間について語ることであるから意味があると言っているようにも見えます。

次に、石川良子『ひきこもりの〈ゴール〉』からです。石川は、当事者は就労も対人関係獲得も回復として十分に感受していない、ひきこもり肯定論にも反発がある、故に、従来と異なる「ひきこもり」像を描く必要があるとして、その研究・書物の目的をこう書いています。すなわち、「本書は、当事者の経験を読み解くことを通して、「ひきこもり」とは何か、「ひきこもり」からの〈回復〉とは何か、ということを問い直すものである」[3]、とです。ところで、いささか落ち着かないことなのですが、石川はその調査対象についてこう書いています。「調査協力者のほとんどは、保健所や精神保健福祉センター、医療機関などの支援サービスを利用したり、自助グループに参加したりした経験をもっている。このことからは、彼／彼女らは自らの置かれた状況を問題と見なし、その解決を目指してきた人々だと言える」[4]、とです。しかし、石川は、そのような「人々」の中から、世に言われる回復論にも肯定論にも「反発」する当事者の語りを聴くことを通して、それを書きとめることを通して、こう書いていきます。

---

[3] 石川良子『ひきこもりの〈ゴール〉――「就労」でもなく「対人関係」でもなく』（青弓社、2007 年）16 頁。
[4] 同書、17 頁。

> 働くことはもちろん、他者と関わることから難しくなっている人に対して、私たちは一体どう向き合えばいいのだろうか。[5]
> 「ひきこもり」への根強く厳しい批判も、ひきこもっていない人々による自己防衛として理解することができるだろう。つまり、相対的剝奪感の源泉としての社会を糾弾するのではなく「ひきこもり」の当事者を悪魔化することで、私たちは〈実存的疑問〉を直視することを回避し、存在論的な安心を得ようとしていると考えられるのだ。〔……〕ここで指摘したいのは、「ひきこもり」とは「狂気」同様、人々の存在論的な安心を脅かすような〈実存的疑問〉を喚起する問題、すなわち〈実存的問題〉としてまなざされているのではないか、ということだ。[6]

この石川の語り方は弁証法的人間のそれにあたるようにも見えます。ひきこもっていない正気の人間は、自己防衛に走るばかりで社会を「糾弾」することはしない。おのれの「実存的疑問」を直視することもしない。ひきこもり当事者を悪魔化して、言いかえるならフーコー的な意味で監禁し監視し規律することで、おのれの存在論的安心を得ている、というわけです。では、そのようにして書いている者は、そのようにして「安心」を得ているとは言えないのでしょうか。「どう向き合えばいいのだろうか」という問いは、どう答えられていることになるのでしょうか。

ところで、石川の本は、当事者の語りを聴くことを通してその結論を導く構成になっています。そして、当事者自身による語りはそれなりに多く書かれ読まれるようになっています。そのことを考えるとき、研究者の位置はどうなるのでしょうか。西倉実季の論文「なぜ「語り方」を記述するのか」から引いてみます。西倉は現状を次のように確認します。

> 病い、障害、老い、ジェンダー、セクシュアリティ、エスニシティなど、広義の差別問題については、以前から問題の当事者による手記やセルフ・ノンフィクションが数多く出版されてきた。書店に足を運べば、そうしたジャンルの本がひとつのコーナーを形成しているほどである。語り手の「声」や「リアリティ」に触れたいのであれば、わざわざライフストーリー研究の作品を読むより、むしろ当事者による手記やセルフ・ノンフィクションにあたる方がよほど目的に適っているように思われる。〔……〕当事者による作品においては、書き手自身が直接その声を発しているからである。[7]

---

[5] 同書、226 頁。
[6] 同書、541-242 頁。
[7] 西倉実季「なぜ「語り方」を記述するのか――読者層とライフストーリー研究を発表する意義に注目して」（桜井厚・石川良子『ライフストーリー研究に何ができるか――対話的構築主義の批判的継承』新曜社、2015 年）66-67 頁。

しかし、と西倉は続けて、しかし、「普通」の読み手の側での「障害」や「壮絶人生」の読まれ方には問題があり、しばしば感動やカタルシスを得ようとするだけの読まれ方になっていると述べます。西倉は、こう書いています。

> 語り手の声はたしかに聞かれているはずなのに、一人ひとりの言葉や経験としては注意を向けられることなく、他の声と容易に代替可能な「刺激的な物語」もしくは「エンタテインメント」として消費されることになる。病い、障害、老い、ジェンダー、セクシュアリティ、エスニシティといった差異の声は、その政治性を無化され、支配的な表象にしたがってのみ解釈される。〔……〕しかし、齋藤純一によれば、他者の声を聞くことは本来、自己の安定した位置や優位性を確証させるどころか、むしろ聞き手をヴァルネラブルにする行為である。〔……〕ライフストーリー研究を発表する意義があるとするならば、それはこの点に求められるのではないだろうか。[8]

そのようにして聞き手たる研究者もヴァルネラブルになって、みずからの構えを自覚するし、そのとき、一人ひとりの経験に発せられているはずの声に、自分が想定していた声を覆い被せ、これを聞いていたにすぎないという気づきを得るというのです。そこに研究の意義があるというのです。しかし、かすかな疑念が残ります。近年の研究者の決まり文句になっている「政治性」はどこに行ったのでしょうか。ヴァルネラブルになるとは、ここを読む限り、おのれの「位置」や「優位性」をヴァルネラブルにすることであるはずですが、そんなことは起きているのでしょうか。起こせるのでしょうか。そのように語ることによって、研究者の存在論的な安心を得ているという疑いが萌しはしないのでしょうか。いや、この問いかけは、おのれが弁証法的人間として書いて生きているという立場からの物言いになっています。そして、私にしても、弁証法的人間が死滅したし、それでよいと思っています。しかし、その死滅の後の光景がこれでよいのだろうかとも思うのです。

最後に、ポール・B.プレシアド『あなたがたに話す私はモンスター』から一節を引きます。ここに「あなたがた」とは、フランスの「フロイトの大義」学派の面々ですが、さらに広げて、専門家や研究者、正常とされる人びとを指すと言うことができます。

> あなたがたの女らしさや男らしさは、仮定され防衛されたものであって、それらは私のそれと同様に製作されたものです。この製作の糸車がまだご自身のなかで回っていることを感じ取り、この反復から脱出したいと、自分を脱 - アイデンティティ化したいという欲望を感じるためには、ご自身の規範化の歴史、ジェンダーと性の社会的・政治的な支配コードへの従属の歴史を見なおしてみれば十分でしょう。植民地主義的な家父長制の法の彼方で生きること、性差の法の外で生きること、セックスとジェンダーの暴

[8] 同書、68 頁。

力の外で生きること、これはあらゆる生ける身体――それが精神分析家であれ――がもっているはずの権利です。[9]

私は、それで「十分」とは思えません。おそらくここは、知識人に対するリップサービスというかオルグというか、プレシアドが控え目に書いている気がしますが、その程度のことで「十分」ではないことは歴史的に重々承知させられてきたはずです。そして、プレシアドのこの控え目の告発や糾弾を受けとめるとき、弁証法的人間としてではなく、アカデミーの一員として受けとめるとき、その「欲望」を感じているかと自問します。そして、アカデミーの面々は、果たしてそのような欲望を抱いているのか、正気の正常なマジョリティがそのような欲望を感じるようになるには、何がどうなればよいのかと自問します。そして、その欲望は、はたして書き物に結実することでしょうか。そのような営みや作品や研究は存在しうるでしょうか。その問いを私は解決していませんが、少なくとも、本論文集がアカデミー内部での闘いを示していることは間違いないと思います。「愚かで不可解で無価値とされる生」について物を書いたり読んだりする世界の内部での闘いにとどまるにせよ、そこを考えることがやはり大切であると思います。以上で、合評会というアカデミーへの報告といたします。

（こいずみ・よしゆき）

[9] ポール・B.プレシアド『あなたがたに話す私はモンスター――精神分析アカデミーへの報告』（藤本一勇訳、法政大学出版局、2022 年）49-50 頁。